

教育方針の基本的な考え方(案)

令和6年6月 専門家チーム・政策部

「県立大学基本構想」においては、佐賀県立大学(仮称)について、以下の基本理念(建学の精神)を掲げている。

- (1) 次代を構想する人材の育成
- (2) 「道を究める」研究環境の創出
- (3) 地域との共生と社会貢献
- (4) チャレンジし、成長し続ける大学

また、同じく基本構想では、時代の要請に応え、鳥瞰的な視点を持ち、自ら考え、実践することのできる人材を育成することとしている。

今後、これらを踏まえ、佐賀県立大学(仮称)における教育は、下記の価値、ポイントに重点を置く。

記

1 全般的事項

- 教員と学生がともに、自発的に学びあう、成長できる風土、環境を大切にする。学生の熱量と教員の熱量がシンクロし、ともに高めあう大学を目指す。
- 学生が地域現場で学ぶことは、企業で働く人、地域に住む人にも刺激となる。地域との連携を図り、地域と密着した実践知の創造を身に着ける大学を目指す。
- 加速度的な技術革新による将来予測の困難性の高まりや、気候変動・紛争などによって世界の不確実性が増している時代だからこそ、教育そのものの価値が高まっており、佐賀の未来を創る人材を育成する大学を目指す。
- 大学そのものが、小中高とつながり、地域・企業ともつながることで、子どもたちも、学生も、社会人も企業も、新たな一步を踏み出す契機となる大学を目指す。

2 育成する人材に関すること

- 与えられた課題に対応するだけでなく、課題そのものを発見する力を持つ。
- 与えられた知識や情報のみを頼りにするのではなく、知識や情報を収集・分析・活用する力を持つ。
- 自身の考えだけでなく、他者と意見交換し、議論を深めることで、課題解決につなげる力を持つ。
- 物事の課題を一面的にみるのではなく、多面的にみることができ、社会全体における位置づけをとらえることができる力を持つ。
- チャレンジ精神、起業家精神を持ち、自己研鑽を続け、自ら将来を切り拓くことができる力を持つ。

【今後留意すべき視点】

- ✓ 育成する人材像をイメージしやすいフレーズを検討してはどうか。

考えられるキーワードの例は以下のとおり。

(例)「探究」、「自発」、「変革」、「構想」、「創造」、「共創」、「実行」、「行動」、「実践」

3 教育内容・方法に関すること

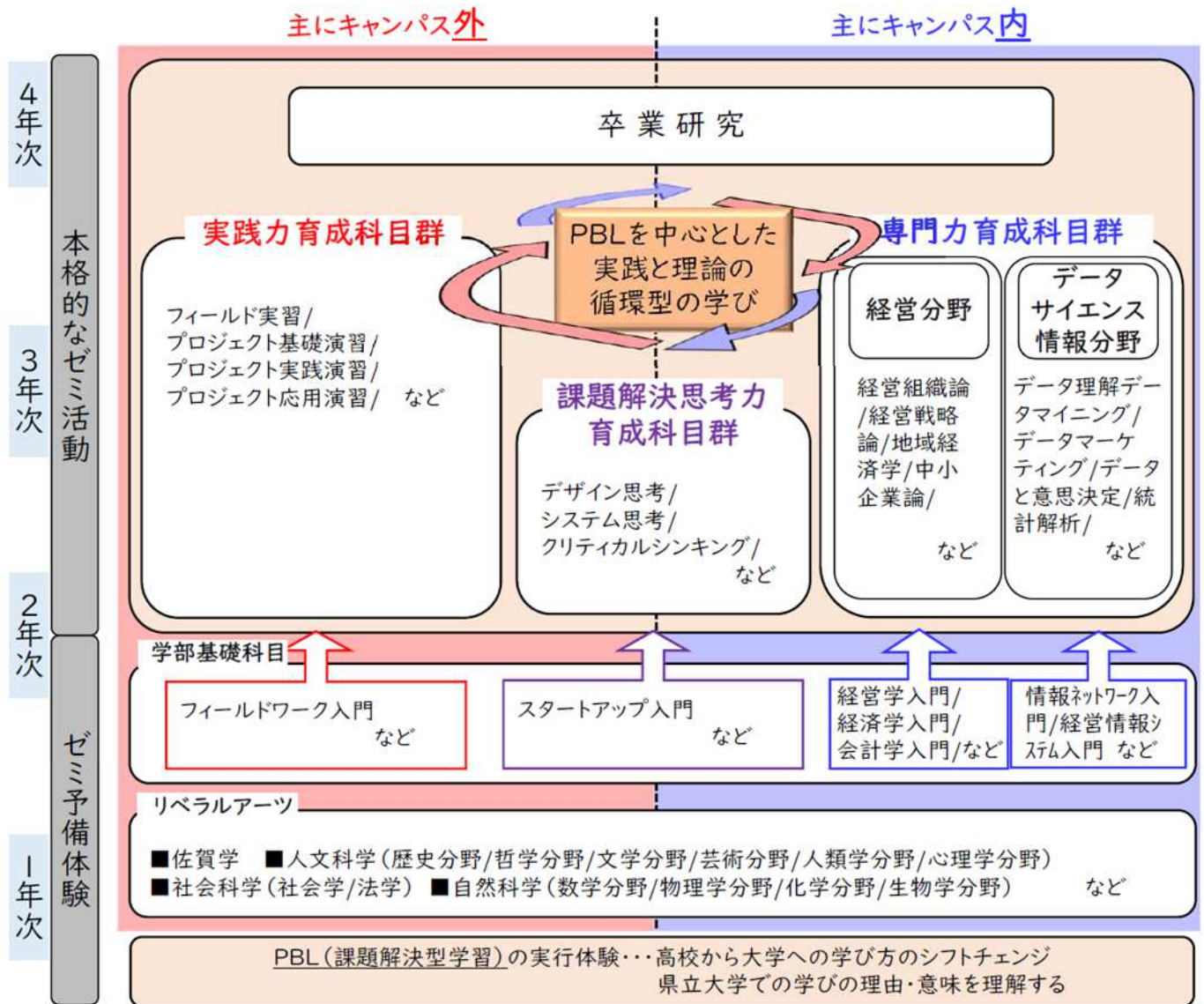
- データサイエンス、AI などいわゆる理系的要素と、マネジメント、組織論などいわゆる文系的要素の双方を理解し、デザイン力などの思考力により知識の統合化が身につく科目編成とする。
- コミュニケーション力、多文化共生論、佐賀学などを学ぶことにより、いわゆるリベラルアーツが身につく科目編成とする。その際、近隣の大学と連携した教員確保に努める。
- 現場での課題解決型学習(PBL)とキャンパスでの専門科目の履修を繰り返す、循環型のカリキュラム体系とし、実践と理論のそれぞれの学びを深める。
- 県全体を学びのフィールドとする。課題解決型学習をはじめとし、キャンパスに閉じこもるのではなく、県内の企業、地域、団体など現場における学習を県内各地で展開する。佐賀の食、農業、産業、観光など、佐賀という地域が持つ本物を学びの場とする。
- 教員一人当たりの学生数に留意することにより、教員が一人一人の学生に向き合うことができるような教育環境とする。また、ゼミにおける実践教育を重視する。

- 外から佐賀を学び、より広い視野、コミュニケーション能力を身に付けることができるよう、半年程度、国内外の大学に留学できる仕組みを整えてはどうか。
- 学生が受け身ではなく、学生がやりたいことを実現できる教育を重視する。
- 佐賀大学、西九州大学を中心に他の高等教育機関と連携した教育環境を整える。

【今後留意すべき視点】

- ✓現場重視の視点として、佐賀の本物を学びの場とすることについて、佐賀学として位置付けることができるのではないか。
- ✓PBLの必須化に伴う県内企業の理解促進に、早くから取り組むべきではないか。
- ✓PBLについては、ひとつの企業・現場に対して複数のチームが入って課題解決を図る方法や、ひとつの企業・現場に対してひとつのチームが入って課題解決を図る方法など、様々な方法があることを踏まえて検討すべきではないか。
- ✓学生の主体的な学びのためのディスカッションに適した施設・設備とすべきではないか。
- ✓時代に合わせたカリキュラムの変化などに弾力的に対応できる施設・設備とすべきではないか。

【4年間の学びのイメージ】



4 入学生の受け入れに関すること

- 構想力、コミュニケーション能力などが高く、県立大学で学びたいという熱量が高い学生の入学機会を確保。
- 普通科のみならず、専門学科、総合学科の向学心の高い生徒の入学機会を確保。

【今後留意すべき視点】

- ✓ 構想力、コミュニケーション能力などに秀でた学生の入学機会を確保するため、高校生を対象とした県事業での取組や、県立高校の探究学習などの状況を、入学者選抜に活用してはどうか。
- ✓ 熱量のある学生の入学機会の確保のため、面接その他の方法により、一般入試とは異なる選抜方法を重視してはどうか。
- ✓ 県内の全ての高等学校に指定校推薦枠を設けることとしてはどうか。

5 その他、教育、研究など大学の教育に関連する事項

- 県立大学は、教育、研究の知見を活かし企業現場からの期待にも応えることが必要。このため、産学官による連携や地域との連携に関するコーディネート機能を備える。
- PBL や企業連携などについて、個々の教員に過剰な負担を強いるのではなく、大学組織として対応できる体制を構築すべき。
- 県内の高校など教育関係者との連携を深め、大学と他の教育機関による相乗効果を生み出す関係を構築すべき。
- 県内各地で活動する学生のベースキャンプとなる場所の確保を検討すべき。

この「教育方針の基本的な考え方(案)」は、大学の核心である教育、大学の特色といったソフト面に関する基本姿勢である。この考え方をベースに、さらなる意見交換を様々な場面で重ね、大学の教育方針として重要なディプロマポリシー(卒業認定・学位授与方針)、カリキュラムポリシー(教育課程編成・実施方針)、アドミッションポリシー(入学者受入れの方針)をはじめとして、具体的なカリキュラム編成、教員採用の在り方、入試制度の在り方などの詳細な制度設計を進めていく。

なお、制度設計にあたっては、各取組を段階的に実施するなど、開学後の運用を見据えた検討を進める。